

## 国産ワインの飛翔のために

国税庁醸造試験所  
所長 西谷尚道

お酒にご縁の深い「酉」年がスタートした。

酉の字の意味は、「成熟」を表わし、秋に成熟した農作物を収穫し、それを原料として新酒を醸し出し、それぞれの酒に応じた熟成期間を経て飲み頃を迎える訳である。

さて、ワインは原料の品質が製品の品質に与える影響が非常に大きく、そのためかワイン生産者がぶどう栽培農家を兼ねている場合、あるいは両者が密接な関係を保っている場合が多く、原料の品質を非常に重視する点では他の酒類にみられない現象であろう。

このことは、国産ワインの個性を確立するうえで、気候風土に適した原料ぶどうの栽培が如何に大切であるかを物語っている。

最近、国内における醸造専用ぶどう品種の作付が地域的に拡大されてきており、かつての生食用ぶどう原料からの脱却の方向がみられ、このことは今後の国産ワインの品質のためにも喜ばしいことである。

毎年11月に当醸造試験所では、「洋酒・果実酒鑑評会」を開催しているが、最近の出品酒の品質内容からみて、原料、醸造、熟成、調合の各段階で工夫の跡がみられ、それぞれに品質の個性化を目指している様子がうかがわれる。

ワインをはじめとする洋酒は、そもそも我が国で生まれ育った酒ではなく、当然ながらその発祥は西洋にある。したがって、過去、技術面、品質面での理想像は、専らそれぞれの洋酒の祖国に求め続けてきたといえよう。

しかし、よく考えてみると、日本人と西洋人、つまり彼我の酒類消費者の嗜好が果たして同じなのであろうか。嗜好の形成は、生まれ育った土地の気候風土などの自然環境や食習慣、文化、宗教などの社会環境に大きく支配されるので、洋の東西間における嗜好の違いは相当に大きい物と考えられるからである。

わが国の文明開化の黎明期に、西洋文化の一つとしての洋酒が遥ばる極東の地へ渡来してから既に一世紀以上の時が流れた。この間、我が国の洋酒は、模倣期から定着期を経て、そろそろ独創期を確立する時期に来ている。その意味でも、真に大和民族の嗜好を捉えた品質設計による Japanese ワインの創出が望まれる。

近年、酒類市場の国際化が一段と進展するなかで、特にワインをはじめとする洋酒は、元来、発祥の地が西洋にあるだけに国際市場の最前戦に立たざるをえない状況にある。

このような厳しい環境におかれている今こそ、それぞれの酒類の困って来る源を振り返ってみる必要があろう。元々、酒類は各国それぞれの地域の主要農作物と密接に関係しながら発達したといえよう。したがって、酒類の品質に地域ごとの個性（ローカル・カラー）が生じるのは当然であり、これが酒類の産地イメージを形成している。

そのような意味でも、今後とも農業と醸造の二人三脚による、真の意味での地に足のついた歩みがますます重要になろう。

以上をふまえ、原料ぶどうの栽培家とワイン醸造家からなる ASEV JAPAN の国際的な情報ネットワークとしての役割を期待するとともに、国産ワインが今年の干支「酉」の如く大いに飛翔することを願ってやまない。